



発行責任者: 歯学部長 宮崎 隆, 編集責任者: 広報委員長 井上 富雄
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>



巻頭言: 新たな歯学教育・歯科医療を指向する

歯科病院長 岡野 友宏

皆様には素晴らしい新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年暮れ、日本学術会議の歯学委員会主催で「新たな歯科医療制度を考える」というシンポジウムが開催され、私は「歯科医療: 医療との共通点と特異性」という表題で講演をさせていただきました。その準備をしているときに、どこかで聞いた小松秀樹氏(現亀田総合病院副院長)の話を思い出していました。彼は、「医療や医学教育の体制は医師によって構築されるべきであって官が関与すべきことではない。医師は科学に基づいて適切な体制を作る。その証拠に WHO や CDC はすべて医師が仕切っている。これに対して行政官は法による統治を原則とし原理主義的であって患者や医師のための医療を築くことはできない」という趣旨のことを発言していました。また利益団体である医師会などは診療報酬の改定には口を挟むべきではないとも言っています。ある意味で非常に割り切ったものの言い方ですが、正鵠をとらえていると思います。

3年前、私が日本口腔科学会の理事のとき、その雑誌の巻頭言を依頼され以下の提案をし、少なからず賛同の声を頂きました。すなわち、「広く歯科医療体制と歯学教育の再構築を指向する『歯科医療教育協議会』を創生したい。それは行政者、一般社会人、歯科医療者、歯学教育・研究者を含めた協議会であり、今後の歯科医療・歯科医学研究の展望、歯学部入学者の資質・数、歯学教育内容、共用試験や資格試験とその実施、初期臨床研修の在り方、生涯学習など広範囲にわたる調査研究を通じて今後の方向性や目標を定め、その目標に到達するために必要な事項を勧告し、その勧告を實踐できる強力な権力基盤をこれに付与する。その協議会の目的は国民の口腔保健の向上と患者の保護にあり、決して一部の集団の利益を代表するものであってはならない」。このような考えに至ったのは、その数年前に昭和大学の基金で2週間ほど英国の歯学教育と歯科医療とを視察した経験に基づきます。英国には、General Dental Council (GDC)の組織があり、GDCは歯科分野のすべての専



門職を束ねる歯科医療の質の担保を目的とし、市民代表10名と歯科医療関係者20名弱で構成されています。歯学教育の指針であるThe First Five Yearsも発行していますが、その詳細は昭和歯学会雑誌(2004; 24: 241-254)に紹介しましたし、GDCのURLをご覧になれば最近の活動を知ることができます。一方、医療ではその当時ブレア首相による NHS (National Health Service)の大改革が進行中でした。最近、竹内和久氏による「公平・無料・国営を貫く英国の医療改革」(2009年、集英社新書0502B)を読んで改めて医療の効率化と地域に根ざした患者中心の医療、公共財として医療の実現に向かうブレア首相の実行力に感心しました。

わが国の医学・歯学の教育改革や歯科を含む医療の改革、これらはいずれも状況のよくわかった現場の教育者や医療者の代表と、これに必要な学識者と一般市民が加わった協議会を立ち上げて調査・研究を行い、その成果に基づいた政策をまた行政を交えて立案するべきです。

第38回インド補綴歯科学会で講演を行いました

歯科補綴学教室 馬場 一美

2010年11月12日から14日に行われたインド補綴歯科学会(IPS)にて招待講演をして参りました。学会はインド中央部に位置するインドールで行われ、約1200名の参加者がありました。一般講演は通常スタイルで行われましたが、講演中に突然電源が落ち、会場が真っ暗になったことが数度あり驚きました。それにも増して、真っ暗な中でマイクなしで講演を続けた演者には感心しました。ポスターセッションは屋外で行われ、様々な形・大きさのポスターが壁に貼られている光景は大変興味深いものでした。日本補綴歯科学会では昨年よりIPS若手研究員の受入事業を行っており、今回の招待講演も含めて両学会間には非常に親密な関係にあります。昭和大学でもインド人留学生を受け入れており、お気づきの方も多いかと思いますが、彼らと接して強く感じることは礼儀正しさと勤勉さです。私たち日本人も原点に立ち戻る必要性を感じます。



3年生学部連携 PBL が実施されました

歯科医学教育推進室 片岡 竜太

昭和大学では「チーム医療ができる医療人を育てる」をキーワードとして、医療系総合大学の特色と全寮制という環境を活かして、4学部連携教育を推進しています。この教育の卒前のゴールは、5年生で実施する昭和大学附属病院における「学部連携病棟実習」です。本実習は、4学部学生グループ(4~6人)が各病棟で実際の入院患者さんを1週間担当させていただき、医科、歯科、薬剤、看護、理学、作業にわたる医療情報を学生が共有した上で、患者さんにとって望ましい医療とは何かをディスカッションし、現場の医療スタッフに提案をするものです。平成23年度から必修化され、6月、10月、11月にのべ105病棟で実施されます。5年生で行う「学部連携病棟実習」のシミュレーションとして、4年生では、模擬カルテなどをシナリオとして、4学部学生が共有した情報を基に、患者さんの問題点を明らかにし、対応策をグループでディスカッションするPBLを本年3月に実施します。

本題の「3年生学部連携 PBL」はペーパーペーシェント(シナリオ)を基にした PBL ですが、昨年12月10日(金)、17日(金)、21日(火)に実施されました。4学部の学生がそれぞれの専門分野の知識を基に、ディスカッションを行い、グループとして患者さんに対する最良の治療・ケアについて考えました。12月10日と17日の午前中は教員が同席して PBL 室でディスカッションを行い、

午後には実習室で学生だけでディスカッションを行いました。最初は堅さが見られた学生達も、午後はリラックスした雰囲気の中で、活発なディスカッションをして



していました。21日はグループで討論し、調べた内容をまとめて発表する発表会を実施しました。本 PBL は今年度が3年目で、旗の台キャンパスと横浜キャンパスで600名に対して実施しました。皆2年間の成長をお互いに驚き、それぞれの専門的知識を身につけた仲間を尊敬しあう場面が多くみられました。また患者さんを多面的にみることにより、よりよい医療が提供できることに気づいた学生が多くみられました。さらに、各グループで各学部の代表として、責任を持って発言することの重要性に気づき、医療人としての自覚が生まれたという声も多く聞かれました。このような教育を受けた学生が、それぞれの医療現場で本当のチーム医療を始める日は遠くないと思います。

学部連携PBLを体験して

歯学部3年 佐藤 薫子

今回、他の学部の学生とPBLに参加したことは、私にとってとても良い刺激となりました。PBLが始まる前は、歯科の分野はどのようにチーム医療に携われるのかと疑問に思っていました。その理由は、実習で病院の見学をした時に医師、薬剤師、看護師、理学療法士は、連携して患者さんを診ていたのに対し、歯科医師だけは治療内容も全く違い、他の分野から孤立しているように感じたからです。

しかし学部連携PBLを通して、歯科は他の分野とは少し違うからこそ、チーム医療のなかでとても大事な役割を担うことができると実感しました。例えば、誤嚥性肺炎防止には口腔清掃が最も有効で、これを自ら行うことでリハビリが出来、患者の自信回復やQOLの向上にも繋がります。このような口腔と全身の関連性について、歯科医師が患者に指導をし、他の分野の医療従事者と知識や情報を共有することにより、患者さんにさらに良い医療を提供できると感じました。

今回の学部連携PBLを通して、将来歯科医師として誇りをもってチーム医療に参加し、患者さんによりよい医療を提供できるように、専門分野についてはもちろん、専門外の分野についても積極的に勉強していきたいと思いました。



行事予定

広報委員長 井上 富雄

- 2月2日:4年生 共用試験(CBT)
- 2月5日, 6日:第104回歯科医師国家試験
- 2月19日:大学院歯学研究科Ⅱ期入試
- 2月20日:4年生 共用試験(OSCE)
- 2月27日:入学試験(選抜Ⅱ期)
- 3月2日:4年生 CBT 追再試験
- 3月3日:5年生 iOSCA
- 3月10日:4年生 OSCE 追再試
- 3月17日:卒業式
- 3月18日:大学院修了式
- 3月22日:第104回歯科医師国家試験合格発表

ネパール口唇口蓋裂医療チーム派遣プロジェクトに参加して

歯科麻酔科 増田 陸雄

2010年11月27日から12月5日までネパール口唇口蓋裂医療チーム派遣事業(主催:ADRA Japan)に参加しました。この事業は1995年の第1回目から、医療機会の不足や貧困のために病院で治療を受けることができない患者を対象に無料で実施されています。これまでに約700人、今年も45人の治療を行いました。

チームは医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士、栄養士、ボランティアスタッフの計38人の構成で、歯科医師は私ひとりだけの参加でした。麻酔を担当したのですが、日本で普段使っている薬がない！モニターがない！麻酔器がない！で、初めは非常に戸惑いました。実際に怖い思いも何例か経験しましたが、五感と今までの経験を頼りに無事に乗り切ることができました。

病棟では術後の感染予防に、看護師によって歯磨き指導が行われました。患者の中には今までに歯ブラシを使ったことがなく、木の棒で歯を擦るだけという習慣の子もいました。今回はオペ室での業務に専従したので、次回参加する際には麻酔だけでなく周術期の口腔ケアを通じてチーム医療に貢献したいと思います。



初めてのボランティア活動を通じて、「愛は地球を救う」という意味が分かった気がしました。

診療統計(平成22年12月分)

医事課長 久米 徳明

	患者数	1日平均	前月1日平均	前年1日平均
外来患者	18,220	792.2	768.6	776.3
入院患者	412	13.3	14.3	15.5

第6回学生生活指導のための教育職員ガイダンスが実施されました

歯学教育研修センター 伊佐津 克彦

平成22年12月8日(水)の午後5時30分より、旗の台上條講堂で、「第6回学生生活指導のための教育職員ガイダンス」が実施されました。医歯薬保健医療学部から多数の教員が参加しましたが、歯学部からは58名の教員が参加しました。富士吉田教育部学生部長の田中一正先生の開会の辞に始まり、学長の片桐先生のご挨拶があり、その後、臨床感染症学の二木 芳人先生と学生相談室カウンセラーの平野 学先生に講演をして頂きました。二木先生からは「感染症の現状と学生生活」というタイトルで、富士吉田の寮での新型インフルエンザ感染も含めた身近な事例も含めて、院内で注意する、市中で注意する、そして学生の日常生活で注意する感染症をわかりやすくお話頂きました。学生相談室カウンセラーの平野 学先生からは「学生相談室の今、事例もふまえて」というタイトルで、今の学生にどのように対応し、学生相談室をどのように活用できるかという内容で講演が行われました。質疑応答も含め予定の6時30分ではおさまらない医歯薬保健医療学部へ共通した濃い内容でした。最後に保健医療学部の石野 徳子先生の閉会の辞で終了しました。



スチューデント・インストラクター制度ができました

歯学部長 宮崎 隆

本学学部学生の教育・研究・医療の指導者としての資質を向上させることを目的として、スチューデント・インストラクター(SI)制度が平成23年4月1日から施行されます。SIに任命された学生は関係職員の指示監督のもとに、(1)授業実施補助、(2)大学行事支援、(3)学生会活動支援の業務を行います。本学各学部在籍する学生は、だれでもSIの応募資格があり、所定の応募用紙に必要事項を記入して応募することができます。SIの採否は、学長、各学部長、各学生部長を委員としたSI委員会で審議され、採用の場合は学長からSIに任命されます。SI業務を行うに当たって交通費等がかかる場合は、実費が支給され、業務終了後は学長から感謝状が贈呈されます。SI制度を利用した授業等の実施をお考えの先生は、実施予定の月の前々月末までに「SI業務申請書」を教務課にご提出下さい。SI委員会で審議の後、承認・不承認等が決まります。学生の業績にもなりますので、教育業務等の補助・支援を必要とする場合は、この制度の活用をご検討下さい。

南アジア歯科審美学会で講演しました

美容歯科 古川 匡恵

2010年12月2日から4日までバングラデシュ・ダッカで開催された第2回 South Asian Academy of Aesthetic Dentistry Regional Conference 2010(南アジア歯科審美学会)にゲストスピーカーとして参加しました。この学会は昨年、第1回がネパールで開催された学会です。今回はバングラデシュ歯科審美学会と同時開催ということもあり、参加者が500人以上で大盛況でした。また、主な参加国はインド・スリランカ・ネパール・パキスタンでした。学会は南アジア独特の緩やかなお国柄から、スケジュールも講演時間も曖昧な準備態勢でした。学会初日から私の予想通り、道路の渋滞やその国民性から送迎が来るのが1時間半の遅れ、また学会の開始も全て時間通りではありませんでした。そんな状況の中、私は日本の審美歯科の実態を中心に日本独自の審美修復である歯のマニキュアについて講演とハンズオンを行いました。学会の初日の一番初めの講演しかも女性(今回は私以外の女性のスピーカーはありませんでした)ということもあり、注目して頂き、多くの人とディスカッションができる良い機会になりました。

南アジアという発展途上国のイメージが先行しますが、インドやスリランカの先生方のインプラントや外科矯正を取り入れた難しい



症例の発表が多かったのは印象的でした。この学会は新聞にも大きく取り上げられ、準備の割に大勢の人が集まった理由がわかったような気がしました。最後は大きな楯(special award as speaker)をいただき深く感動しました。

このような日本の歯科審美を南アジアで紹介できる機会を与えていただき、熱心なディスカッションができたことを真鍋厚史教授、久光久教授にこの場をお借りして心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



医療コミュニケーションファシリテータ養成セミナーに参加しました

高齢者歯科学教室 下平 修

去る12月11日(土)、12日(日)に名古屋市で行われた第4回医療コミュニケーションファシリテータ養成セミナー(中級編)へ、総合診療歯科の伊佐津克彦先生とともに参加いたしました。今回のセミナーは初めて中級編として開催され、OSCEの評価などを超えた実際の医療現場に必要なコミュニケーション能力開発を、臨床推論、フィードバックのためのトランスクリプト(面接内容の記録)、模擬授業と体系的に実習しました。その際には愛知学院大学の研修医の方々やSP研究会の方のご協力をいただき、極めて実践的な環境で学ぶことができました。また対人コミュニケーション技法のレクチャーでは、東京ディズニーシーの立ち上げメンバーとして米国ディズニー社とショーの企画を担当された南山大学 渡辺義和先生や、演劇をコミュニケーション教育に応用している広島大学 難波博孝先生から理論的に基礎を教えてくださいました。

コミュニケーションというあまりにも身近で当たり前のために、それを学ぶことが雲をつかむように感じていましたが、さまざまな角度から整理していただくことでとても興味深く参加できました。2日間みっちり内容の濃いワークショップでしたが、教育、臨床だけでなく実生活にも十分役立つ、実り多いものとなりました。

受賞

広報委員長 井上 富雄

第2回 South Asian Academy of Aesthetic Dentistry Regional Conference 2010 (南アジア歯科審美学会) Special award as speaker: 美容歯科 古川 匡恵

編集後記

口腔解剖学教室 野中 直子

2011年も幕を明け、1か月が過ぎました。春には人それぞれの思いがあります。さりげなく春を迎える初春、今年こそはという思いのこもった新春、春を称える頌春などです。また、この季節は大学にとっては学業を修めて卒業する学生、学年末試験に立ち向かう学生、国家試験を受ける学生、入学試験に挑戦する受験生など人それぞれの異なった立場と思いがあります。しかし、1年はあつという間に過ぎていきます。今年は兎年ですが、何事もびよんぴよんと軽やかに飛び越えて行きたいと思います。今年も昭和大学そして皆様にとりまして良い年となりますことを祈念しております。最後になりましたが、入学試験も始まりお忙しい中、原稿執筆を快く受けてくださった皆様に深く感謝いたします。

